

郡上方言における待遇表現に関する一考察

A Study on *Taigu*-expressions in Gujo dialect

山田 敏弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

郡上方言の文法については、岐阜県立郡上高等学校方言研究会編 (1952) に記された記述ならびに例文から文法的表現を拾って報告したことがある (山田敏弘2003)。郡上方言は、岐阜県美濃地方北部方言として位置付けられ、文法表現に関しても、その地理的位置から岐阜市など美濃南部との類似点・相違点を併せ持つほか、飛騨方言との共通点も少なからず見つかる、岐阜県の方言の中でも特徴のある方言である。特に、敬語に関しては、全国的にも珍しい独自の謙讓語形式を保有し、尊敬語に関しても複数の形式が使い分けられるほか、終助詞によっても丁寧さが表現される点で興味深い現象を呈する方言である。

本考察は、2006年度と2007年度におこなった長良川流域グロットグラム調査の結果から、特に、待遇表現について詳述し考察する。調査は、筆者が岐阜大学教育学部にて3年生対象に開講している国語学各論Ⅳにおいておこなったもので、郡上市最北端の高鷲町から最南端の美並町、さらには隣接する美濃市須原上河和 (該当する地域は、地図中に網掛けをして示した) までの22地点を調査した。回答は、10代から90歳まで、101名の方からいただいた。地点によっては、若年層データがまったく集まらなかったところもあり、データの年代構成に偏りがあるが、その点は素直に反省材料とし、今回の調査結果から分かることを見ていくことにする。

なお、データの報告と簡単な考察については、山田敏弘編 (2009) として、すでに刊行済みである。山田 (2009) では、当該調査で取り上げた100項目近い事項について、一部分分析が間に合わなかった音声項目を除いて、網羅的に報告した。敬語に関しても、一部重複する記述があるが、本考察においては、山田 (2009) をふまえ新たに考察を深めていくことをご承知おき願いたい。



2. 調査概要と結果提示方法に関する説明

調査は、学生のべ53名とともに、2006年度は7月下旬に1泊2日で、2007年度は8月上旬に2泊3日でおこなわれた。調査協力者は、事前に当該授業の担当である山田が郡上市ならびに美濃市教育委員会をはじめ各地の協力者の助言を得てお願いしておいた方が中心となっているが、事前の予告無しにお願いし協力してくださった方も含まれている。

調査地点は、旧国鉄越美南線を引き継いだ第三セクターの長良川鉄道の駅を基準に、おおそ均等な距離になるように配慮し選定した。特に、今回は、長良川をはさむように兩岸を調査していった。これは、川がことばを運ぶ通路になるか、ことばの往来を阻む障壁となるのかを、将来の下流域で調

べるためのものである。川幅の比較的狭い地域でおこなわれた今回の調査結果においては、明瞭な差異は観察されず、この観点からの考察はおこなわない。

表には、2008年から生年を単純に引き算して出した年齢を縦軸に取り、長良川の上流を左に、高鷲町、白鳥町、大和町、八幡町、美並町、美濃市の順に並べ、その地点・年齢のインフォーマントの回答を記号化して載せた。上部に \frown があるものは併用語形で左側が第一回答である。また、外住歴が比較的長くことばへの影響が考えられた回答者については、50%の灰色で示した。

質問方法は、まず、それぞれの表の上にあるような質問を投げかけ、第一回答を得た。第一回答が得られない場合には、複数の、この地方で用いることが予想される俚言形を矢継ぎ早に言い述べ、その中に使用するものがあれば答えてもらうという方法を採用した。第一回答であるか、このような誘導による回答であるかの差は、表の中には示していない。

2. 尊敬語

岐阜県の尊敬語に関する全県的な分布は、加藤毅編 (1998) に見られるように、揖斐郡の一部に無敬語地帯が見られるほかは、全県的に「～ッセル」が分布し、岐阜市周辺と東濃や飛騨に「～ンサル」が広く分布するなど、一般に豊かな敬語形式が観察される。郡上市に限ってみると、飛騨南部に散見される「～ナレル」が八幡町で報告されるほかは、広く「～ッセル」が報告され、美濃南部との違いは際立ってはいない。しかしながら、今回の調査結果から以下に述べるような、美濃地方南部とも飛騨地方とも異なる様相が浮かび上がった。

ここでは、規則動詞「書く」に関する非過去ならびに過去の尊敬語形と、不規則動詞「行く・来る」の尊敬語形を見ていく。

2.1 「書く」の非過去尊敬語形

まず、一般的な尊敬語形について、五段動詞「書く」を例にその形式を伺った。

【問】「先生が手紙をお書きになる。」というとき、「お書きになる」を何と言いますか。

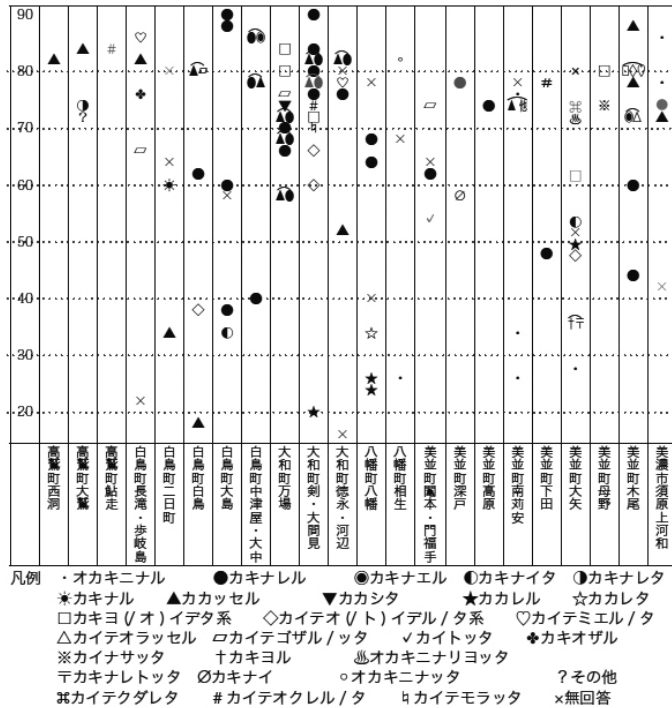


表1 尊敬語（非過去）

今回は、自由回答だけでも、以上に挙げた25を越える非常に多様な形式が得られた（実際には、意図しない形式との複合形が多く含まれているが、この点については後述する）。

多くの形式が観察された場合には、まず、分布を見ていく必要がある。八幡町などもっとも多くの回答が得られたのは「カキナレル●」系の形式であった。この表では表してないが、「カキナレル●」は、美並町洲原上河和でも85歳男性と71歳男性から、あえて個別語形の使用の有無に関しお答えいただいた中で使用すると回答を質問で得ている。同じ質問で、八幡町の30代以下の4名（いずれも女性）も、「カキナレル●」の使用をあえて問われればあると答えている。「カキナレル●」が、当該地域を代表する尊敬語形式であると言ってよいであろう。なお、特に北飛騨で多く使用が観察される「カキナル●」は、白鳥町二日町の60歳から1回答が見られたのみであった。

しかしながら、南部の美並町において、この「カキナレル●」系は、どちらかと言えば少数派である。特に、美並町大矢や下田では、「聞いたことがある」程度の回答が多く、南茱安で「カキナレル●」を使用すると回答したのは、26歳男性のみであった。また、美並町木尾(こんの)に見られるように、高齢層では「カカッセル▲」を用い、比較的若い世代で「カキナレル●」という語形が見られる点には注意したい。この結果だけを見ると、古く「カカッセル▲」が分布していたところに「カキナレル●」が新たに勢力を拡大してきたようにも見られる。郡上共通語としての意識からの再興であろうか。この「カカッセル▲」が優勢であるのは、白鳥町北部から高鷲町にかけてにおいても同様である。「～ナレル」は、岐阜県立郡上高等学校方言研究会編（1952:111）に「郡一円 多」とあり、今から半世紀前においても周辺部でも一定の使用は見られたと考えられるが、その濃淡は一律であったか、あらためて考えなければならない。

また、複数の形式が同じ地域で併存する場合には、その内在する差についても留意する必要がある。ここでは、「カキナレル●」と「カカッセル▲」の敬意が同程度のものであるかを考えてみる。

今回、「お書きになる」を方言で何というかという質問をした。このことから、ふつうに考えれば、「カカッセル▲」「カキナレル●」は、双方とも、尊敬語形として回答されたことになる。しかし、郡上高等学校方言研究会編 (1952) および野田 (1959:141-142) にも、この2形式の敬意に関し、敬意は「～ナレル」が「～ッセル」より上である旨書かれている。今回の調査においても、「カカッセル▲」は、「崩れた感じ (美並町東母野 (はんの) 80歳男性)」、「敬語でない (美並町閻本 (くじもと) 61歳男性)」などの意識も観察された。特に、大和町や白鳥町南部では、「カカッセル▲」と「カキナレル●」の併用も少なからず見られ、何らかの敬意の差によって使い分けられていると考えるのが妥当である。

敬語は、共通語においても、「お～になる」と助動詞「れる・られる」のような2形式が併存する。これらは、二重敬語として現代の正しい用法とは認められないが、実際には重複して「お～になられる」という形式で用いられることもある。しかし、郡上方言においては、「*カキナラッセル」(あるいは「*カカッセナレル」)のような形式は存在しない(実在しない理論的構築形式には「*」を頭に付けて示す)。このことから、論理的には尊敬語という同一のレベルに存在する異形式と捉えなければならない。一方で、関西地方で用いられる「～ハル」などは、「お豆さんが煮えてはる」と用いられるように、尊敬語形式から丁寧語形式へのずれを指摘する研究もあり、尊敬語出自であることと、現在も尊敬語としての機能を有しているということは必ずしも同一のことではない。「～ッセル」も同様に、尊敬語から丁寧語としての機能へと、複数形式の併存という状況の当然の帰結としてずれ込んできていることが推定できる。

これを踏まえた上で、美並町の「カキナレル●」系形式が若い人の間で、(それよりも上の年齢層と比較して相対的に) 増えていると見られることについて考えておきたい。敬意の捉え方の地域差もあるだろうが、それが同一であると仮定した場合、なぜ、「カキナレル●」系がより多く用いられるようになってきているのであろうか。今回の質問が、主語である「先生」に対する敬意を問うものであったことから、「先生」への敬意が上ってきたという捉え方もできるかもしれないが、それはまったく実感にそぐわない。むしろ、同じ郡上(郡)という枠組みはあったものの言語的には多様であった言語状況が、交通の発達、また郡上市誕生等を通じ、一体化してきているとも考えられよう。現段階では確証に至る証拠がないため、このような可能性の指摘に留め、今後の詳細な調査を俟ちたい。

さて、ここで今回得られた形式の多様性について少し考えておかなければならない。今回は「先生が手紙をお書きになる」と、現在のこととして質問をしたが、実際の回答の中で、過去形であるかあるいは進行形(もしくはそれらを組み合わせたもの)のように、意図と異なる語形が多く得られることによって形式数が増えたことも見逃せない。進行を含む語形については、「カイトオイデル」や「カイトイデル」およびその過去形のように、「カイト」というテ形に「オイデル」が付いたもの(◇)、愛知県まで広く用いられる「カイトミエル」およびその過去形(♡)、「カイトオル」に「ッセル」系の敬語が付いた「カイトオラッセル△」、ゴザルを補助動詞として用いた「カイトゴザル□」, さらにその変形と考えられる「カキオザル♣」などが見られた。また、現在のことについて過去の形式で答えたのは、「カキナイタ○」「カキナレタ●」「カカシタ▼」「カキナサッタ※」「オカキニナリヨッタ♠」「オカキニナッタ○」等であった。さらに過去進行形の「カキヨイデタ□」「カイトオイデタ◇」「カイトミエタ♡」「カキナレトッタ⊥」等も観察された。

これらの形式が回答された背景には、第三者の動作は観察して示すということが根底にあると考えられる。「先生が手紙をお書きになる」とは、「毎日」や「よく」を入れて習慣的動作にすることによって、出てこない形式ではないが、一般には未来の出来事の予測に過ぎない。当然、観察して述べているわけではない。非過去・非進行という形は、実生活でよく用いられる形ではないのであろう。このことが、上記のような進行や過去の形式としての回答の多さにつながったものと考えられる。

今回は、実際の調査に当たった学生に非過去・非進行の形式を問うているという十分な意識がなかったことにより、このようなばらけた回答となってしまった。調査自体の反省材料としなければならないが、本当に問うべき形式（場面）を考えなければならないことも、再認識することとなった。

2.2 「書く」の過去尊敬語形

では、過去の場合はどうであろうか。結果は次の通りとなった。

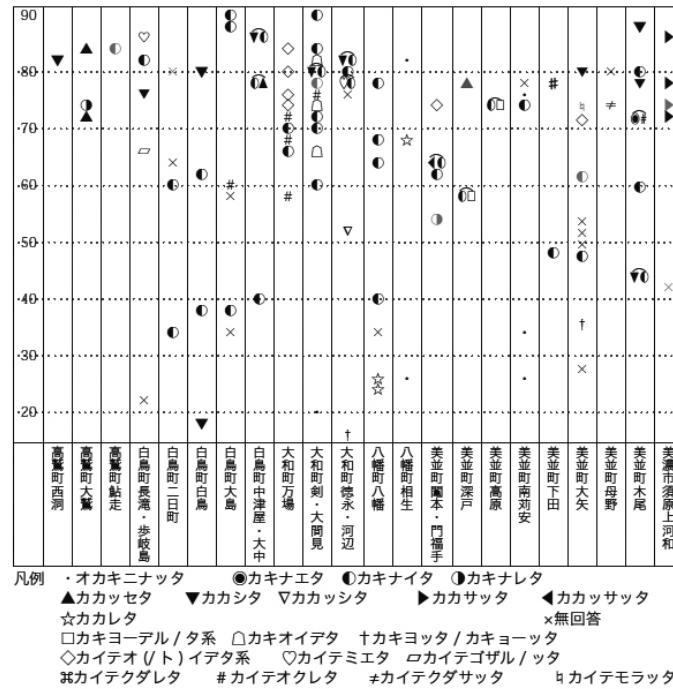


表2 尊敬語（過去）

上の表2のように、全般的には「カキナイタ◎」が多く見られる。この「カキナイタ◎」は、一段動詞の「カキナレル●」から直接、活用によって得られる形ではない。ひとつの考え方には、高鷲町大鷲で観察された（「カキナレル」の理論的に正しい過去形である）「カキナレタ◎」のrが脱落し、さらに母音が変化したものと捉えることができよう。美並町の「カキナエタ●」のような形が高鷲にもあったとすれば、カキナレタ→カキナエタ→カキナイタと変化していったと考えられるが、今回の結果からだけでは、その証拠は十分ではない。

注意しなければならないのは、表1に見られた白鳥町二日町の「カキナル●」と回答したインフォーマントが、過去形では「カキナイタ◎」と答えていることである。ラ行五段動詞の非音便連用形「カキナリタ」から流音rの脱落したものと考えることもできなくないが、周囲に広く分布する「カキナイタ◎」の影響の可能性の方が高いであろう。使用頻度の低い非過去で古形を残し、過去形では域内の頻用形式である「カキナイタ◎」を用いているということであろうか。

次に多く見られるのは、やはり、これは、郡上市の外縁部に多く見られるが、「カカッセル」の過去形としての「カカッセタ▲」「カカシタ▼」「カカシタ▽」「カカサッタ▶」「カカッサッタ◀」である。これもやはり「カカッセル」から派生するとすれば、「カカッセタ▲」が理論的に得られる形となる。この語形が高鷲町に見られたのは、古形と言えようか。「カカシタ▼」も、尊敬の助動詞

「す」を用いた「書かす」の活用形と見れば理論的に得られる形であるが、尊敬を表す「す」は、野田 (1959:142) にあるように、室町時代の狂言に用いられていたとしても、中央において平安時代以降には衰退しており、直接「書かす」に由来する過去形とは考えにくい（非過去として「カカス」も見られない）。また、サ行イ音便のある時代に「カカシタ」が存在していたとしたら「カカイタ」へと変化した可能性もあることから、やはり、「カカシタ」から促音が落ちた形と捉えるのが妥当であろう。美濃市須原上河和でかたまて見られた「カカサツタ▶」については、2009年度におこなう美濃市と関市の方言調査の結果を見て報告したい。

以上、主に形態論的観点からの語形変化を中心に見てきた。最後に敬意の捉え方について、恩恵表現との関係を見ておこう。前節の非過去形の場合同様、本節の過去形についても、進行を表す「ヨル」や「テオイデル」「テゴザル」を含む語形、ならびに、恩恵を表す「クレル」系の補助動詞が付加された語形が多く見られた。特に、恩恵を表す形式は、表1よりも表2における方が、わずかではあるが使用が多くなっている。「先生が手紙を書く」という、話者にとって直接関係のない事態であるにもかかわらず、このような恩恵表現が、単なる取り違いと言えないほど多く用いられていることについて、やはり、恩恵表現が敬意の一表示形式として機能していることを考えなければならないであろう。特に過去において多く用いられていることについては、恩恵表現が話者の観察を通じた事態の捉え方を表す形式であることが関与しているものと考えられる。恩恵という事態の捉え方が、待遇表現という枠組みの中でどのように捉えられているかと併せて考えていかなければならない。

これまで、敬語の形式自体を問うことが、方言研究における分布を調べる際には重要視されてきたが、敬意表現全般にわたって、単に敬語という形式だけでは表せられない恩恵表現等を用いた表示の仕方についても考えていく必要がある。今回の調査では、形式を問うという目的が統一されていなかったために、いわば怪我の功名的に、敬意をどのように表すかという観点での、多様な形式が採取された。このことは決して無駄なことではなく、地域が異なれば敬意の表し方も違うということを考える重要性が示唆されることとなった。今後、このような「敬意」の表示の仕方について、よりよい調査方法を考えつつ、調査に臨みたい。

2.3 不規則動詞「行く・来る」の尊敬語形

不規則動詞「行く・来る」については、2007年度調査において、大和町以北でのみ調査をおこなった。

【問】「先生が学校へいらっしゃる」「社長が会社へいらっしゃる」の「いらっしゃる」をどうい
いますか。(第一回答。場面に合わない不適切な回答は除く)

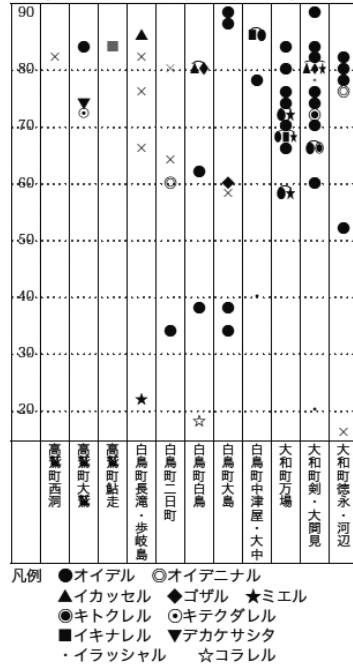


表3 不規則動詞「行く・来る」の尊敬語

文脈からは、これが「行く」なのか「来る」なのかは判別しがたいが、回答では、「キトクレル●」「キテクダサル◎」「コラレル※」と「来る」の尊敬語を用いた数よりも、「イキナレル■」「イカッセル▲」と「行く」の尊敬語を用いた回答の方が多く見られた。

残りの「オイデル●」「ゴザル◆」について、「行く」「来る」のどちらで捉えたかは不問に付した上で、分布を見ていくと、域内全域で「オイデル●」が優勢で「ゴザル◆」はわずか3回答が得られたのみであった。郡上高等学校方言研究会編(1952:191)では、

オイデル > ゴザル・オザル > オリヤル・オヤル

という敬意の違いが示されており、「カキナレル」と「カカッセル」同様、単純に分布の問題として域内で「オイデル●」が優勢と言い切れない可能性は残すが、少なくとも「オイデル●」がよく用いられていることは事実と言えるであろう。

このような移動動詞と、尊敬語形において同一の形式になることが多いのが、存在動詞「いる」(当地では「オル」)である。2.1で、意図しない語形として採取された進行形式では、「カキヨ(/オ)イデタ□」と「カイトオ(/ト)イデル/タ◇」が10例にであったのに対し、「カイトゴザッタ□」は4例、「カキオザル■」1例と、表3ほどの大差はつかなかった。縮約形を含むことの多い「オイデル」系よりも、より分析的な「ゴザル」のほうが、補助動詞としての形式的なわかりやすさもあって、頻用されている可能性もある。

「オイデル」と「ゴザル」については、終助詞との相性の観点から、第5節でも取り上げる。

「ミエル★」に関しては、大和町の高齢層を中心に、主に併用語形として観察された。まだ、当地の優勢な方言形式として用いられているという段階ではないようである。

3. 依頼表現

依頼とは、聞き手に働きかけて話し手に利益のある行為をさせることである。そのため、同じ人物

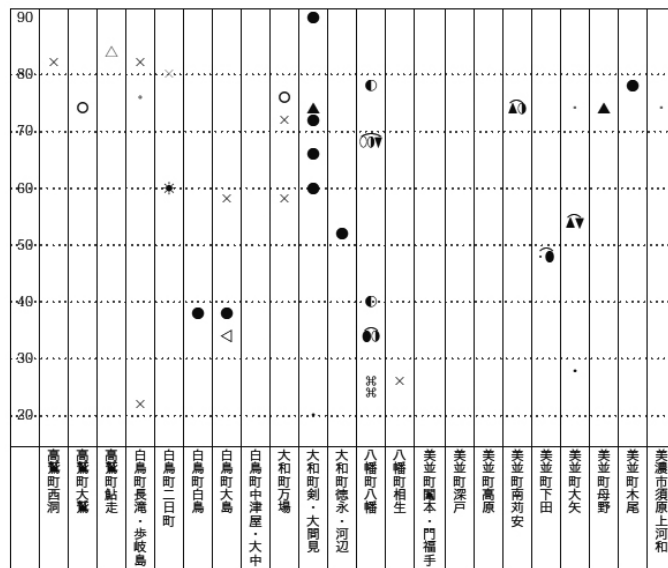


表4 「先生」や「社長」など目上の人に対する依頼表現（上段：男性，下段：女性）

年齢に関し見てみると、60代以下では、男性が「キトクレンカナ●」等の疑問形を用いているのに対し、女性は比較的下の年齢でも「キトクレ●」を用いている。男性の方がより丁寧な形を用いている反面、女性が簡素な表現を用いるのは親しみの表出方法の違いの現れなのであろうか。

依頼に関しては、「～テクレル」を用いた依頼形式が、バリエーションも多く、数量的にも多く用いられているのに対し、「～テモラエル」系は、「キテモラエンカ(ナ)▲」「キテモラエンヤロカ▼」「キテモラエルカナ△」「キテモラッテイイデスカ▷」「キテイタダケマスカ/マセンカ<」「キテイタダキタイ△」と、バリエーションは少なくないがいずれも共通語的な要素の組み合わせで用いられる。年齢で見ると高齢層でも、「～テモラエル」系は用いられており、共通語の使用が、若い人における変化の結果として得られたものというよりは、方言社会におけるより敬意の高いひとつの表現方法として利用されていると捉えるべきであろう。

3.2 気安い昔からの友人に対して行為を促す場合の依頼表現

昔からの気安い友だちに対しては、命令形の「コイ(ヨ)◇」や「オイデ(ヨ)□」が多くなる。これらは単独で用いられることはまれで、命令のきつさをやわらげるために、ふつう「ヨ」という終助詞を伴う。また、「キテヨ□」も少なくない。

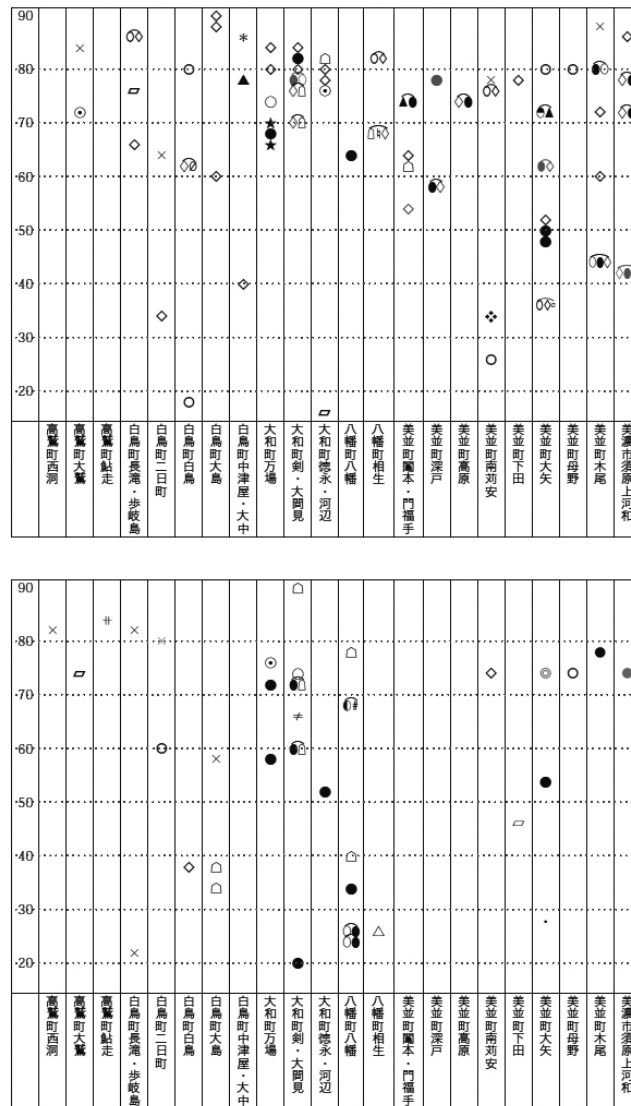


表5 気安い昔からの友人に対する依頼表現 (上段：男性，下段：女性)

性差については、女性では、大和町や八幡町を中心に、やや「キトクレ●」が多く用いられている。前節で見たように、もっとも丁寧な場合にも用いられる「キトクレ●」が、特に女性に多く用いられていることについては、やはり女性がより丁寧な形式を志向することの表れと見ることができようである。しかし、前節で見たように男性が「キトクレカナ●」等の（より形式的に複雑な）疑問形を用いる反面、女性が「キトクレ●」一辺倒であることも考え合わせると、女性のことばの形式的多様性が男性のことばに比べ貧弱で、その分ひとつの形式が担う敬意のレンジを広げているとも考えられる。個人差と考え合わせながらさらに追求すべき点である。今後の課題としたい。

3.3 息子や娘に対して行為を促す場合の依頼表現

3.2節よりもさらに敬意が低い場合について、息子や娘に対する依頼表現（命令表現と言ってもよい）を見ていく。

結果としては、「コイヨ◇」が男女ともに広く見られた。女性では、多く「オイデ□」も用いられている。特徴的なのはこれらがいずれも、共通語でも用いられる語形であるという点である。方言でしか用いられない「キトクレ●」のような語形は、より若い世代に対して使わない、あるいは使いに

くいという傾向を、この調査結果には見ることができる。これが方言衰退のひとつの原因と言ってよいであろう。

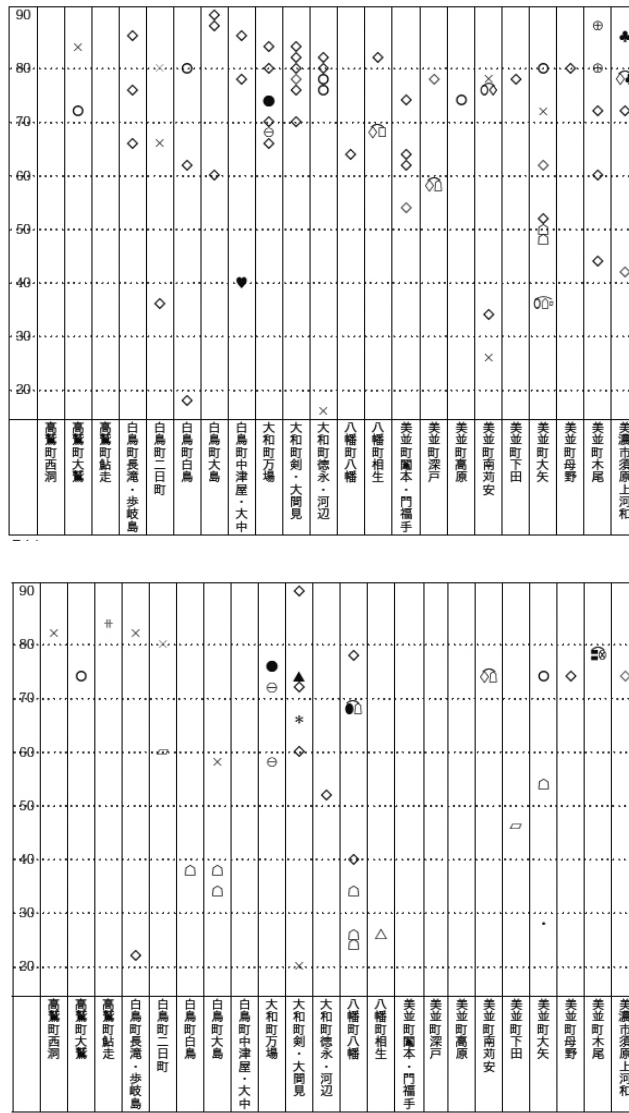


表6 息子や娘に対する依頼表現（上段：男性，下段：女性）

3.2 同様、待遇的な配慮を考えなくてもいい場合には、形式が単純になる傾向が、ここでも確認された。

3.4 自分より5歳ほど年下の、あまり親しくない人に対して行為を促す場合の依頼表現

一方、若い人という意味では、3.3節と同じであるが、あまり親しくない人の場合には、多様な形式が見られた。待遇配慮の本質を考えた場合、素材敬語的な人物に対する敬意よりも聞き手の親疎に対する配慮が形式の多様性を生じさせていることは、今回の調査範囲に限って言えば確かであろう。

具体的な形式については、男性では、少なからず「キテモラエンカ▲」という回答が、高齢層を中心に見られることが挙げられる。反面、男性では、「コイ(ヨ)◇」や「キテ(オ)クレ○」のような、比較的ぞんざいな形式も散見される。親疎の捉え方次第で、多様な形式が用いられているものと推察される。

女性では、やはり「キトクレ●」が多く見られるほか、若い世代では「オイデ(ヨ)□」や「キテヨ

ロ] もいくつか見ることができる。これだけでは詳しい分析ができないが、待遇形式の共通語化（同時にそれは形式の減少という変化でもある）が、特に女性のことばで進みつつあることは指摘できよう。

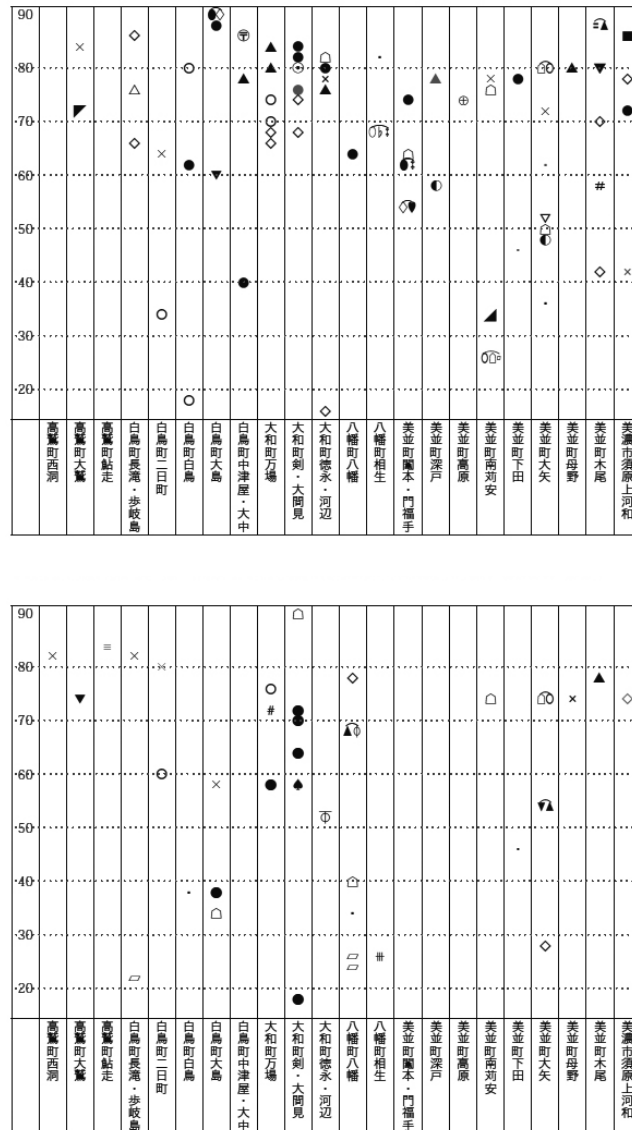


表7 自分より年下の親しくない人に対する依頼表現（上段：男性，下段：女性）

上述の通り、依頼表現は、動作主に対し、話し手の利益となる事態実現を働きかける点で、もっとも待遇意識が現れやすい表現である。今回、調査した4つの場面では、3.1のような目上の人に対する場合でもっとも敬意の高い形式が用いられることのほか、多様な形式が観察されることも確認された。性差に関しては、男性が女性よりも多様な形式を用いる傾向にあることがわかった。

4. 謙譲語

郡上方言には、全国的に珍しい、生産的な謙譲語接頭形式「カリテ～」ならびに「ムラッテ～(モラッテ～)」が存在することが知られている。「カリテ～」は、「行く」などのことばとともに用いられ、話し手をへりくだらせる働きを有する。また、「ムラッテ～(モラッテ～)」は、「食う」などの動詞とともに用いられ、やはり謙遜の意味を表現する。

今回は、それぞれの形式について、形式の消長と待遇的意味について、調査結果から考察する。

4.1 「カリテク」

謙讓接頭形式「カリテ～」は、野田 (1959:142) によれば、「行く、来る、遊ぶ、寝るなど自分の動作を表す語を修飾して謙遜の意を表す」形式である。中でも頻用される「カリテク」(＜「カリテ+イク」) は、「伺う」という意味をもつ。今回、まず、単純に用いるか否かを問うたら、次のような結果となった。

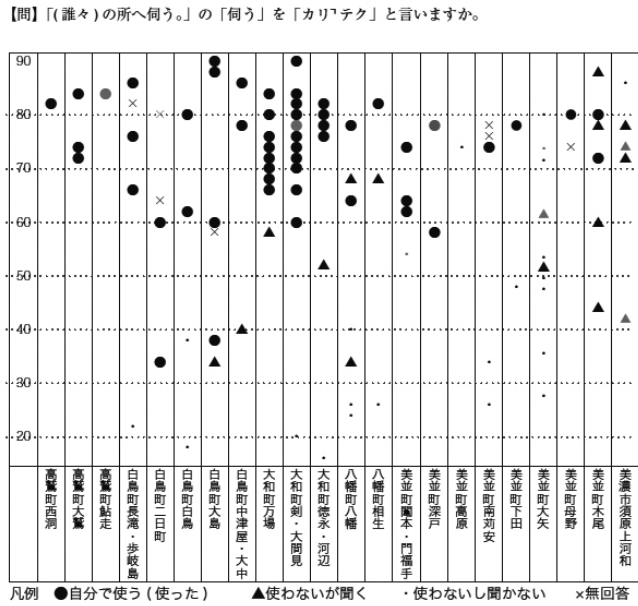
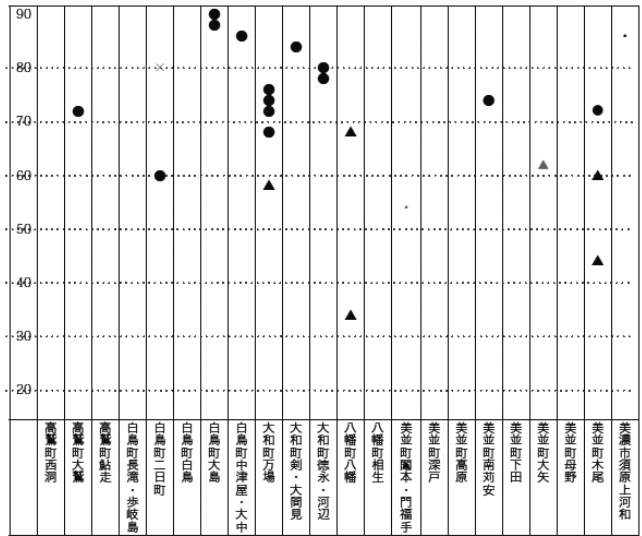


表8 謙讓表現「カリテク」

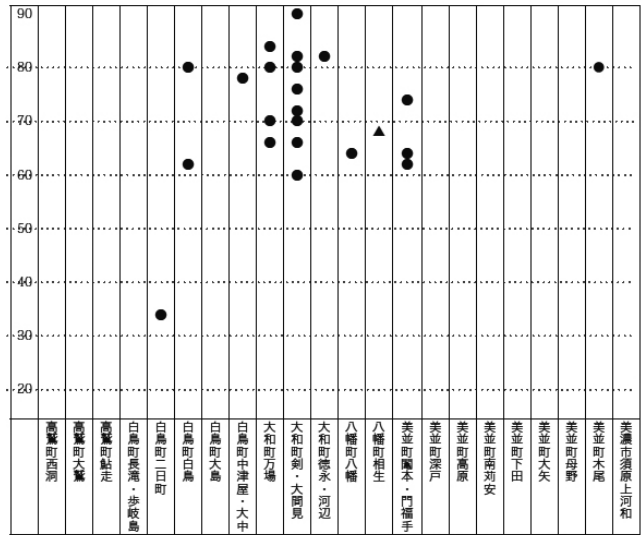
「カリテク」は、全般に、60代以上で用いられているが、それ以下では衰退傾向にあることが見て取れる。全国的にも珍しい謙讓語形式である。珍奇さは衰退の大きな要因となりうる。

では、この「カリテク」をどのような相手に対して用いるかを詳しく見てみよう。表8の回答者の中から、「目上の人に対して用いる」という回答をした人と、「誰に対しても用いることができる」とした人を順に示すと次のようになる(単に使用の有無のみを回答した人もあり、表9の記号を合わせても表8にはならない)。

【問】「(誰々の)所へ伺う。」の「伺う」を「カリテク」と言いますか。



凡例 ●▲「使う」「聞く」という中で、特に目上の人に対して用いると回答した人



凡例 ●▲「使う」「聞く」という中で、誰に対しても用いることができると回答した人

表9 謙讓表現「カリテク」を用いる相手

これだけの回答から正確な記述をおこなうことは難しいが、特に目上の人に対して用いる（上段）のほうが、周辺部にまで分布していることがわかる。ここから、八幡町から白鳥町で、謙讓性が徐々に失われていく反面、周辺部に謙讓語としての性質がより強く残っていることと見ることができようか。一方で、下段の表が示すとおり、大和町を中心として「誰にでも用いることができる」という解答が多く見られることは、謙讓語が、新しい敬語の分類でいう丁寧語（謙讓語形を用いつつも丁寧語に近づいた用法をもつ敬語）へと変化していることを示唆するものである。

いずれにしても、60代以下ではほぼ用いられていないことも明瞭に示されている。意味の変容と形式自体の衰退という2つの方向性が、この「カリテク」には見ることができる。

4.2 「モラッテクウ」

次に『郡上方言』に類似の謙讓語形式として挙げられる「モラッテ〜」について調べた。

【問】 「(食べ物)をいただく」と言いたい時、「モラッテクウ」と言いますか。

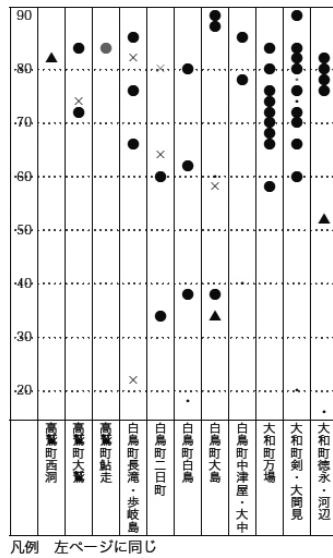


表10 謙讓表現「モラッテクウ」

この調査は、07年度のみおこなわれたため、八幡町や美並町での分布はわからないが、おおよそ「カリテ～」と同じ分布を、大和町以北では見せている。

ただし、この「モラッテクウ」という言い方は、実際、「もらう」と「くう」という継続的な2動作として捉えることも可能であり、謙讓語形式として用いられているかどうかには疑問もなくはない。白鳥町の30代に使用が認められるのもそのためであろう。また、以前の調査で、「もらう」という「無償にて所有権が移る」ということを意味しない動作に対しては用いることができないことがわかっており、この点においても謙讓語接頭辞として文化化していると認定することには慎重になったほうがよいかもしれない。

なお、この「モラッテクウ」を用いないと答えた人、あるいは、「モラッテクウ」を用いるとした人の中でも、「イタダク」や(「饗応にあずかる」の意での)「ヨバレル」を用いると回答している人が少なくないことも付け加えておく。

5. 終助詞

待遇表現に関する考察の最後に、終助詞を見ていくことは、何も珍奇なことではない。今回は、あいさつ表現に関し、「オイデルカエ・オイデルカナ」ならびに「ゴザルカエ・ゴザルカナ」を調査したが、ここでは「オイデル」と「ゴザル」という尊敬語形自体の敬意と、「カエ」「カナ」という終助詞の敬意との関連を中心に考察していく。

なお、今回は、大和町以北においてのみ調査した。また、性差も考え、性別別に左が男性、右が女性と分けて表に表す。

「オイデル」と「ゴザル」については、すでに2.3で述べたとおりであり、「オイデル」のほうが相対的に敬意が高い。「オイデル」と「ゴザル」の違いについては、大和町徳永・河辺の80代男性2名から、「オイデル」のほうが丁寧であり目上の人に用いる反面、「ゴザル」は親しい人に対して用いるという敬意の違いとして意識されていると取れる証言が得られている。これは郡上高等学校方言研究会編(1952)でも、「オキヤクサマカオイデタ」や「センセーガムカイヨイキョーオイデル」のように、述語部分を除いてほぼ共通語らしく訳が書かれていることとも符合する。

終助詞については、白鳥町大島の80代男性から「カエ」は男性ことばとの証言があるように、性差としての意識がある。丁寧さの差としての意識があると捉えてよいだろう。一般に、「カエ」のほうがやや荒っぽく、「カナ」のほうが優しい印象を与える。

今回は、親しい人の家に遊びに行ったときの挨拶として「オイデルカエ/オイデルカナ」ならびに「ゴザルカエ/ゴザルカナ」を用いるかどうかという質問をした。まず、より丁寧な「オイデル」との相性については、以下のような結果となった。

【問】 親しい人の家に遊びに行ったとき、オイデルカエ オイデルカナといますか。

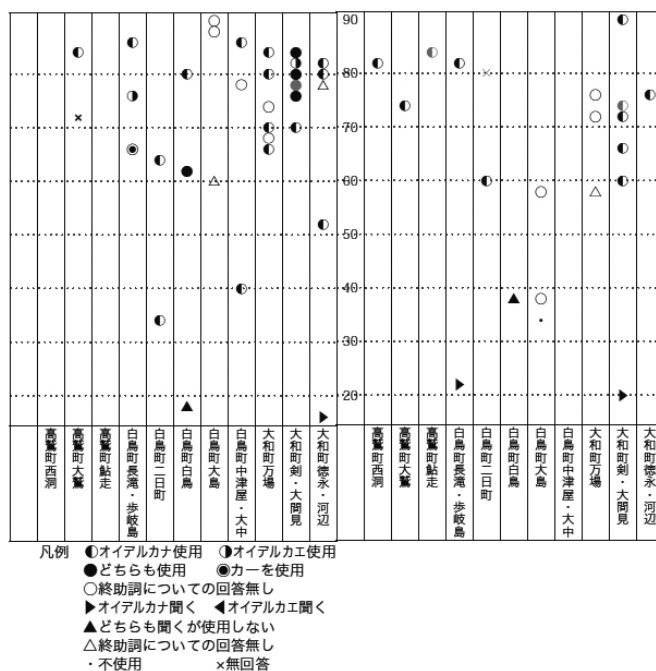


表11 あいさつ表現「オイデルカエ・オイデルカナ」

「オイデル」は、終助詞との組み合わせに関して圧倒的に「カナ」と結びつく傾向が見られる。性差に関しては、女性(表の右側)に「カナ」が多く見られる。おそらく、「ナ」に相当する共通語の「ね」と、「エ」に相当する「よ」を比較しても、おおよそ同じように「よ」のほうがきつくなることと同じく捉えることができよう(ただし、郡上方言において「カエ」は、共通語の「かよ」ほどきついわけではなく、むしろ「かい」のような、やややさしいニュアンスで捉えたほうが近いと考えられる)。

次に「ゴザル」はどうであろうか。終助詞との組み合わせで見ると、「ゴザル」に関しては、大和町では「カナ」がやや多いが、白鳥町以北では「カエ」が優勢であるように見える。

【問】 親しい人の家に遊びに行ったとき、ゴザルカエ ゴザルカナといますか。

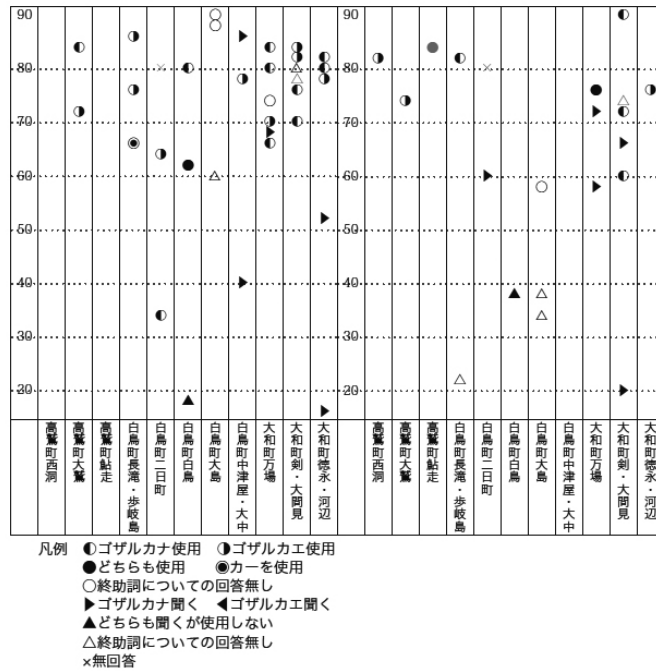


表12 あいさつ表現「ゴザルカエ・ゴザルカナ」

「ゴザル」は「カエ」と、「オイデル」は「カナ」と結びつきやすい傾向は、男性でも見られるが、女性のほうがはっきりと差が現れている。女性のほうが、敬語動詞と終助詞との組み合わせについては、細やかに使い分けしていると見ることができそうである。

年齢差については、若い人でも「オイデル」「ゴザル」ともに、よく耳にははされているようであるが、使用はやはり60代以上に限定されていると見てよからうか。

「オイデルカエ」「オイデルカナ」,「ゴザルカナ」「ゴザルカエ」は、あいさつ表現とはいえ、固定化したものではなく、「いらっしゃいますか」と尋ねているに過ぎない。そのため、待遇差にも敏感で、語形のバリエーションから、個々の要素の待遇差をも考えることもできる興味深い表現である。

6. 終わりに

今回は、郡上方言について、その待遇表現に着目し、グロットグラム調査をもとに分析をおこなってきた。以上の考察をまとめると次のようになる。

年齢差に関しては、おおよそ60歳以上と以下では、大きな差を呈することが、いずれの地域でも観察された。謙譲形式「カリテク」のように、衰退傾向がはっきり現れるものもあれば、「オイデル」「クトクレ」のように若い世代に比較的受け継がれている方言もある。形式ごとに差があるとはいえ、60歳という年齢に方言衰退のひとつの転機を見ることができ。60年前と言えばちょうど1948年。団塊の世代が習得していったことばは、方言にとってもターニングポイントであることがはっきりと確認できた。

地域差に関しては、白鳥町、大和町、八幡町という郡上市中心部と、高鷲町、美並町という周辺部とでは、やはり方言の分布の違いが見られるものもあった。特に、尊敬語形式「～ナレル」と「～ッセル」の分布や「カリテク」の意味のように、郡上市の中での周圏分布と思われる分布も観察された。

性差に関しては、男性の方が相手に応じて多様な形式を使い分けている反面、女性は、特に終助詞の用法に関し使い分けが明瞭であることがわかった。敬意を表す形式にも性差があるひとつの証拠となろう。

最後に、調査できなかった項目について触れておかなければならない。野田 (1959) には、郡上方言の待遇表現について、オマイよりもアンタの方が丁寧で上品な言い方であること (*ibid.*:143) や、父など身内に対しても敬語を用いる絶対敬語の地域であること (*ibid.*:146) が記されている。これらの特徴についての十分な調査は、今回、おこなえなかった。今後の課題としたい。

【付記】

郡上高等学校方言研究会編 (1952) や、野田 (1959) をはじめとして、郡上方言を知る上で重要な知見・考察があればこそ、このような考察ができた。また、郡上市ならびに美濃市教育委員会、各地域振興事務所、そしてインフォーマント各位をはじめ協力くださった多くの方の温かな協力がなければ、この調査も完遂し得なかった。あらためて感謝申し上げます。

【参考文献】

- 奥村三雄編 (1976)『岐阜県方言の研究』大衆書房
岐阜県立郡上高等学校方言研究会編 (1952)『郡上方言 第一集・語彙編』
野田直治 (1959)「郡上方言の敬語表現」『郡高四十年史』
藤原与一 (1978)『昭和日本語方言の総合的研究第1巻 方言敬語法の研究』春陽堂
山田敏弘 (2003)「『郡上方言』の文法」『岐阜大学教育学部研究報告』52-1
山田敏弘編 (2009)『ぎふ・ことばの研究ノート8 郡上方言の地域差と年代差』